

理科 第4学年 生き物の1年をふり返って

自分の学級に合わせて直すプロンプト

下の枠の文を全部そのままAI（ChatGPT・Claude・Gemini など）に貼り、質問に答えると、この単元の学習指導案が自分の学級に合わせて直ります。枠の後半には、直す対象の学習指導案が入っています。

あなたは小学校4年の理科の授業づくりを手伝う役です。この後の「生き物の1年をふり返って」の学習指導案を私の学級に合わせて直してください。先に学級の人数と活動の組み方、既習の内容と残っている記録、学習上の困難や必要な配慮、単元に使える時間と研究授業の位置、使える器具・資料・ICTと安全管理について、一つずつ質問し、私の答えを待ってください。答えがそろったら、問い「季節ごとの記録を並べると、生き物の変化にどんな関係が見えるだろうか」と学習指導要領の範囲、評価の観点を保ちながら、活動と支援を具体的に直してください。教科書の本文・挿絵・固有の問題は転載しないでください。未知の児童の実態や未測定の結果は作らず、数値には出典か私の回答を付けてください。安全に実施できない活動は、同じ問いを考えられる公的資料や記録へ替えてください。先生に渡す文に内部の識別番号やを出さないでください。元と同じ見出しの順で全文を示し、変更理由と根拠にした回答を最後に書いてください。直す対象の学習指導案は、この後に続けて書きます。

————ここから直す対象の学習指導案————

第4学年 理科学習指導案

1 単元名 「生き物の1年をふり返って」

2 単元の目標

動物の活動や植物の成長は、季節の暖かさの変化と関係していることを理解し、実物の観察・実験と記録を扱う技能を身に付ける。「季節ごとの記録を並べると、生き物の変化にどんな関係が見えるだろうか」を追究し、根拠を基に考えを表す。自分の記録を見直し、分からないことを確かめながら学習に取り組む。(B(2))

3 単元の評価規準

〔知識・技能〕①動物の活動や植物の成長は、季節の暖かさの変化と関係していることを理解している。

〔知識・技能〕②実物の観察・実験と記録について、対象、条件や時期、調べて分かったことを区別して記録している。

〔思考・判断・表現〕①既習の内容や生活経験を根拠に、「季節ごとの記録を並べると、生き物の変化にどんな関係が見えるだろうか」について予想を立て、調べた事実と関係付けて表現している。

〔主体的に学習に取り組む態度〕①生き物の1年をふり返っての学習で生じた疑問について、自分の記録や友達の考えを基に調べ方や説明を見直し、解決しようとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

「生き物の1年をふり返って」は、第4学年のB(2)を手掛かりに、自然の事物・現象を調べる単元である。中心となる理解は、動物の活動や植物の成長は、季節の暖かさの変化と関係していることである。名称を覚えて答えるだけでなく、「季節ごとの記録を並べると、生き物の変化にどんな関係が見えるだろうか」に答えるために何を見て比べればよいかが授業の焦点になる。

本案では、年間の観察記録の対象と日付を確かめるところから始め、気温と生物の変化を対応させる活動を通して考えを確かめる。結論だけを先に提示すると、観察や資料が答え探しになるため、予想と理由を残してから調べる。単元末には年間の変化を説明する資料を完成することで、学んだ言葉と根拠が結び付いているかを確かめる。

学校の既習と実態は資料だけでは決められない。前の記録を見て、説明に必要な言葉や道具の扱いを確かめる。扱ったことのない内容を既習として書き込まず、必要な確認を導入に加える。

(2) 児童について（学級の実態を書く）

(3) 指導について

本時では「季節ごとの記録を並べると、生き物の変化にどんな関係が見えるだろうか」を中心の問いに据える。年間を通じた同じ植物と動物の記録を季節順に並べ、気温の記録と対応する位置に貼る。葉・花・実・

芽、動物の活動を別々に整理し、暖かさとの関係が分かる説明を付ける。

児童の最初の考えを消して正答に直させるのではなく、どの記録で考えが変わったかが分かるよう書き足させる。違う個体や場所の記録を混ぜるときは注記を付ける。すべての植物が冬に葉を落とすとまとめず、記録した種類による違いを残す

資料を読むことや書くことが負担になる児童には、比較する箇所を絞った図、読み上げ、指差しや口頭説明を用意する。説明の代筆は児童に内容を確認してから行い、文字量で理解を判断しない。早く説明できた児童には、同じ説明が当てはまらない記録がないかを探させる。

安全と扱いの留意点は次のとおり。新たな採集を増やさず蓄積した記録を使う。記録に児童の顔や位置情報がある場合は校内での扱いに限定する

5 指導と評価の計画（全4時間）

第1次 第1時：○年間の観察記録の対象と日付を確かめる。○植物の変化を季節順に並べる。 評価：知①・知②（記録・活動の観察）

第2次 第2時：○動物の活動を季節順に並べる。 評価：知①・知②（記録・活動の観察）

第3次 第3時（本時を含む）：○気温と生物の変化を対応させる。○種類による共通点と違いを話す。○年間を通じた同じ植物と動物の記録を季節順に並べ、気温の記録と対応する位置に貼る。葉・花・実・芽、動物の活動を別々に整理し、暖かさとの関係が分かる説明を付ける。 評価：思①（個人の説明・記録）

第4次 第4時：○年間の変化を説明する資料を完成する。 評価：態①（記録の見直し・振り返り）

6 本時の指導（3／4（配当案））

（1）本時の目標

既習の内容や生活経験を根拠に、「季節ごとの記録を並べると、生き物の変化にどんな関係が見えるだろうか」について予想を立て、調べた事実と関係付けて表現することができる。

（2）学習過程

【導入】

学習活動：○前時までの記録から「年間の観察記録の対象と日付を確かめる」ときの疑問を取り出す。

○「季節ごとの記録を並べると、生き物の変化にどんな関係が見えるだろうか」

【めあて】調べた事実を使い、自分の考えと理由を説明しよう。

○一人で予想と理由を書き、調べたい点を確かめる。

予想される児童の反応：・動物の活動や植物の成長は、季節の暖かさの変化と関係しているのか確かめたい。

・前の記録と比べると違いが見つかりそう。

指導上の留意点：・答えを先に示さず、児童がどの記録を根拠にしたかを尋ねる。

・新たな採集を増やさず蓄積した記録を使う。記録に児童の顔や位置情報がある場合は校内での扱いに限定する

【展開】

学習活動：○年間を通じた同じ植物と動物の記録を季節順に並べ、気温の記録と対応する位置に貼る。葉・花・実・芽、動物の活動を別々に整理し、暖かさとの関係が分かる説明を付ける。

○「どの観察結果から、そう考えましたか」

○自分の説明を相手に示し、根拠が同じか違うかを比較する。

○説明できない記録があれば条件や資料の読み方を確かめ直す。

○以前の記録や生活経験をを使い、予想とその根拠を表す。

予想される児童の反応：・同じだと思ったが、比べるところをそろえると違いがある。

・この記録だけではまだ決められない。

・気温と生物の変化を対応させることで、理由を確かめたい。

指導上の留意点：・違う個体や場所の記録を混ぜるときは注記を付ける。すべての植物が冬に葉を落とすとまとめず、記録した種類による違いを残す

・結果に合わない意見も記録へ戻す材料として取り上げ、発言した児童を責めない。

・比較が難しい児童には記録の対応する箇所を指し示し、まず事実を口頭で説明させる。

評価：思① 既習の内容や生活経験を根拠に、「季節ごとの記録を並べると、生き物の変化にどんな関係が見えるだろうか」について予想を立て、調べた事実と関係付けて表現している。（個人の記録と説明。交流前後の

変更理由を含めて見る。)

【まとめ】

学習活動：○本時の問いへの答えを、根拠となる観察結果とともに書く。

【まとめ】動物の活動や植物の成長は、季節の暖かさの変化と関係している。

○最初の考えから変わったことと、まだ調べたいことを記録する。

予想される児童の反応：・考えが変わったのは、記録を比べたときに違いを見付けたから。

・まだ確かめていない条件が残った。

指導上の留意点：・まとめは得られた記録の範囲に限定する。予定どおりの結果が出なければ条件と方法を見直し、実測結果を作り替えない。

・振り返りで分かった支援の必要な点は次時の活動に反映する。

・本時の重点は「以前の記録や生活経験を使い、予想とその根拠を表す。」であり、知識の結論だけで思考の評価を決めない。

評価：知①（まとめの説明）／態①（記録を見直す過程。発言回数や文章量だけで判断しない。）

（３）板書計画

上段に「生き物の１年をふり返って」と本時の問い「季節ごとの記録を並べると、生き物の変化にどんな関係が見えるだろうか」。左側に予想とその理由、中央に実際に調べた事実の記録、右側に事実から考えた説明を置く。中央は条件・時期・対象が分かる見出しにし、比較する記録を同じ高さに並べる。気温と生物の変化を対応させる際に用いた記録を残し、根拠と説明を線で結ぶ。下段には確かめられたことと、まだ残る問いを分けて置く。発言の多い子の説明だけで仕上げず、個人の記録の違いを残す。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ



AI三重